The Woodlanders の中にラディカルさを読み込むことは可能か？

吉 井 浩 司 郎

序論

トマス・ハーディの六作の主要小説の中で第四作目にあたる *The Woodlanders* は、*Macmillan's Magazine* に1886年5月号から翌年の4月号まで連載され[1)]、1887年3月15日に、三巻本としてマクミラン社から出版されたのだが[2)]、その *Macmillan's Magazine* と言えば、ハーディの幻の処女作 *The Poor Man and the Lady by the Poor Man* を出版拒否し、また、実質上の処女作 *Desperate Remedies* の出版も拒絶し、更には、ハーディの出世作となる *Under the Greenwood Tree* の出版を打診するハーディの手紙に対して冷淡な返事を寄越したためにハーディはその手紙を出版拒否の手紙だと誤解して、原稿を送り返すよう再度手紙を出した雑誌であり[3)]、これほどまでもハーディとは縁のなかった雑誌なのであった。また、T. R. Wright によれば、*Macmillan's Magazine* は知的には *the Graphic* などよりも上層階級向けの雑誌であって[4)]、新人の小説家にとって連載をしてもらうのがかなり敷居の高い雑誌なのであった。そのような雑誌の編集長 Mowbray Morris が突然にハーディに連載の依頼をしてきたのであるから、Carl J. Weber は、そのときのハーディを次のように、

> After nearly eighteen years of failure in knocking at the door, Hardy must have been more than delighted when Mowbray Morris, editor of *Macmillan's Magazine*, suddenly asked Hardy for a serial novel.[5)]

と、*The Poor Man and the Lady by the Poor Man* の出版を拒絶されて以来苦節18年の歳月の後だ

けに、“Hardy must have been more than delighted” だったに違いない、と述べている。なお、ウィーバーによれば、この連載依頼を受けたときのハーディは、Max Gate の建築と *The Mayor of Casterbridge* の制作とで二重に忙しい時期ではあったが、

> as soon as those responsibilities had been taken care of, Hardy turned with unusual satisfaction to the writing of *The Woodlanders*.[6)]

と、『森林地の人々』の制作に取りかかったという。

この作品の着想は、モリスの連載依頼の時のものではなく、実は、ハーディの自伝なる *The Life*. によれば、

> and the author of *Far from the Madding Crowd* having been discovered to be a house-decorator(!). Criticism like this influenced him to put aside a woodland story he had thought of (which later took shape in *The Woodlanders*), and make a plunge in a new and untried direction.[7)]

というように、『森林地の人々』の骨子は『狂乱の群れを離れて』の直後に構想されていたものの、田舎の建築家だから田舎を舞台とするパーストラルしか書けないのだという批判を避けるために、随分長く棚上げされたままだったのである。作品の構想の点から言うと、『狂乱の群れを離れて』と『帰郷』との間に来るパーストラルという特徴を持つが、しかし、パーストラルという要素だけではない他の要素も入り込んでいるがそれについては後ほど触れるとして、さて、ハーディにとって憧れの雑誌からの連載依頼であったから、ハーディはこの作品に幻の処女作からハーディ小説に特有のラディカルな主張を盛り込むのを果たして控えたのだろうか。

Michael Millgate はトマス・ハーディの小説の流れには、ラディカルな主張を持つ幻の処女作から出発して、その主張が社会に受け入れられないのをハーディが悟るや、その主張を抑制する中期の作品が続き、後期の『ジュード』に至って再びラディカルな主張が表面に露出してくるというサイクルが形成されている、と主張する。例えば、

> Hardy’s unhappy experience with his first book seems to have taught him not that the concept of the social instrumentality of fiction was invalid, but that it was commercially impracticable, at least for a new and unknown author. In his first published novels he was thus forced to a radical confrontation with the problem of determining what sort of a novelist he was to be, of shaping his

> work to the circumstances of his time and the necessities of his own situation. The process seems to have involved not so much the surrender as the gradual repression, in terms of literary expression, of the kind of emotions, opinions, and attitudes which had gone into *The Poor Man and the Lady*—and which were only to return to the surface in the pages of *Jude the Obscure*.[8)]

ミルゲイトは、上掲のように、ハーディの中期の作品はラディカルな主張が抑制されているとするのだが、その中期の作品の一つである *The Woodlanders* の中に、ラディカルな主張を読み込むことは、果たして、可能なのだろうか。結論を先に述べるなら、ラディカルな主張を読み込むことはできない。ラディカルな要素は作品の一要素として作品全体の構造の中に埋め込まれていて、目立たないように配慮されて提示されている。つまり、テーマとしてではなく、作品の一要素として盛り込まれているに過ぎない。それでは、どのようなラディカルな要素がどのような形で作品の中に忍び込まされているのか、それを探るのが今回の目的である。

(1) 時代の流れがもたらしたもの

この作品は、“the rambler”（ぶらぶら歩きの人）が “for old association’s sake”（古い昔のことを思い出すために）「今は打ち捨てられた馬車道」（“the forsaken coach-road”）を散策すると、

> the many gay charioteers now perished who have rolled along the way, the blistered soles that have trodden it, and the tears that have wetted it, return upon the mind of the loiterer.[9)]

という具合に、これから物語が展開される *The Woodlanders* の舞台が今はもうそこには人が住んでいない、打ち捨てられた世界であるかのような印象を読者に与える書き出しがされている。更には、「打ち捨てられた街道（“a deserted highway”）の地形は、谷やら高原地には見られない程の孤独の様を表す」とか「たった一歩のことで人がいないだけの世界から見放されたものの悪夢（“an incubus of the forlorn”）の空間に身を置くことになる」という具合に、時代の流れの前に取り残されて、うらぶれた街道の様が強調されている。時代の流れに取り残されているのは、この街道のみならず、その街道を往来する定期便の馬車、更には、それを引く馬も “The old horse, whose hair was of the roughness and colour of heather, whose leg-joints, shoulders, and hoofs were distorted by harness and drudgery from colthood … had trodden this road almost daily for twenty years.”（p. 36）と、老いぼれているのである。これからドラマが展開される Little Hintock（リトル・ヒントック）の世界がこのように時代の流れから取り残された世界であり、

> It was one of those sequestered spots outside the gates of the world where may usually be found more meditation than action, and more listlessness than meditation; where reasoning proceeds on narrow premisses, and results in inferences wildly imaginative; yet where, from time to time, dramas of a grandeur and unity truly Sophoclean are enacted in the real, by virtue of the concentrated passions and closely-knit interdependence of the lives therein. (p. 38)

と都会の文明世界から見れば対蹠的とも言うべき辺境の地として提示されている。いわば、時代の流れに置いてきぼりにされた世界としてリトル・ヒントック村は提示されている。しかもそれが Marty（マーティ）と Giles（ジャイルズ）らの生きる田舎社会なのである。

他方、時代の流れと言えば、この作品の女主人公 Grace（グレイス）は、都会の寄宿学校で教育を身につけたあと帰郷するという設定になっているが、これも時代の流れを表している。というのは、女性たちが教育を身につけて、自分よりも身分の上の男性を射止めようとすることは時代の流れ[10]であったのであり、グレイスはそのような女性の一人として設定されている。

つまり、時代の流れが都会の Fitzpiers（フィッツピアーズ）を Little Hintock 村に住まわせ、そこから、主要登場人物たちの人生行路が様々に影響を受ける様を描くのがこの作品の主題だと言っていいだろう。ハーディがマクミランとモリスにこの作品のタイトルとして提案した2つのタイトルをここで想起するなら、それらのタイトルは先述のハーディのこの作品における狙いを反映するものであることが分かるだろう。すなわち、“Fitzpiers at Hintock” と “The Woodlanders” をハーディが提案し、結局、マクミランが後者のタイトルを選んだのであった[11]。

この作品におけるラディカルさに注目するということは、グレイスという女主人公が置かれたヴィクトリア朝時代の女性の境遇と結婚制度及び離婚問題を取り上げることになるのだが、この作品の複数の視点[12]の働きの結果、グレイスの結婚と離婚の問題は作品のテーマの前面に押し出されて扱われているという印象は醸し出されない。むしろ、時代の流れの中に位置づけられて描出されている、と言う方が適切だろう。この点については後ほど詳述するとして、それでは節を改めて、都会の教育を身につけて帰郷してきたグレイスにとって結婚の問題はどのようなものとして扱われているかを、見てみよう。

⑵　グレイスの結婚問題

グレイスの父 Melbury（メルベリー）はその昔彼の友人で、ジャイルズの今は亡き父から恋

人を奪ったことで良心の呵責に苦しめられ、ジャイルズがグレイスを好いているのを見て、二人を結婚させることで昔の罪に対する償いをしようと思う。せっかく結婚をさせるのなら、グレイスをジャイルズにとって出来るだけ素晴らしい贈り物とするために、グレイスに上級の教育を身につけさせたのであった。ところが、この身につけられた教育が当初のメルベリーの意図を超えた影響をもたらす。つまり、当のメルベリーには、都会の教育を身につけたグレイスを田舎者のジャイルズに嫁がせるのが惜しい気持ちを引き起こさせるし、また他方、グレイスとジャイルズとの間に不協和音を引き起こす。例えば、寄宿学校から帰郷してくるグレイスと彼女を迎えに行ったジャイルズとの間には、あたかも接点が何一つ無いかのような関係が次々に描き出されている。ジャイルズにとってグレイスに話が出来るのは、Brownley の farm-buildings が元あった場所から丘の頂上に移設されたのは奇妙に見えるでしょうとか、取り入れたリンゴの山を見て、すりつぶせないほど沢山の収穫があったのだね、と言う程度で、それに対してグレイスは気のない相づちを打つばかり。また、グレイスがジャイルズに話が出来るのは、都会での話やら、この前の夏に大陸旅行に行ったときのことなどで、ジャイルズは “With all my heart”（p. 74）と言って聞いたものの、彼には関心のない内容だった。語り手はこのような二人の遣り取りを描出することで、二人の間にもはや共通の基盤が失われてしまっていることに読者の注意を向けている。つまり読者は、グレイスへのジャイルズの求婚は失敗に終わることだろうという印象を抱かざるを得ない。

ジャイルズは田舎社会に住み続けている訳であって、その田舎社会の生活の延長線上にあるグレイス像しか思い描けないのである。ところが実際のグレイスは、都会の boarding-school の教育を身につけたことで、彼女のアイデンティティの拠り所が田舎社会でもなく、都会の世界でもない、いわばその中間領域に身を置かざるを得なくなっている。そのことが、二人の関係における齟齬を生み、また、グレイスが生家に戻ってきても自分がその家の中で “an alien”（p. 77）となってしまったかのような疎外感を感じる根本となっている。このグレイスの拠って立つところが田舎世界でなくなってしまったという点こそ、この後ジャイルズがグレイスへの求婚を推進する意図で a Christmas party を催したとしても（Chapters 9 and 10）、失敗に終わる原因になっている。

ジャイルズはマーティと共に植樹するときには、

> He had a marvellous power of making trees grow. Although he would seem to shovel in the earth quite carelessly there was a sort of sympathy between himself and the fir, oak, or beech that he was operating on; so that the roots took hold of the soil in a few days. (pp. 93–4)

とも、また、

> Winterborne's fingers were endowed with a gentle conjurer's touch in spreading the roots of each little tree, resulting in a sort of caress under which the delicate fibres all laid themselves out in their proper directions for growth. (p. 94)

とも評されるような、植樹の名人であり、また、"the Autumn's very brother"（p. 235）と象徴的に、土に生きる人々の理想像のように語り手によって讃えられている。ジャイルズは田舎世界の中で生きている限り、彼本来の姿を保つことができるが、グレイスとの関係では、彼本来の姿を見失って、失敗の連続となる。例えば、グレイスのことを考えるあまりに、知らず知らずのうちに、メルベリーを相手に競売で薪木類を買い占めてしまったり（Chapter 7）、マーティと植樹する約束を忘れていたり（Chapter 8）という具合に、彼本来の姿を見失っている様が描かれる。いや、それだけではない。グレイスと結婚した場合、グレイスの乗馬用に購入した馬をメルベリー家の人たちに見せに来たジャイルズは、一家の人々が既に朝食を終えて、次の仕事に取りかかろうとしている事情も察せずに、食事に招かれてそのまま居続けるとか、グレイスとの結婚を考えるあまりに、彼の周りのことがあまり見えなくなっているジャイルズの姿が強調して描き出されている。

ジャイルズは『狂乱の群れを離れて』のゲイブリエル・オウクの後継者でありながら、オウクに特有の現実的認識力がなかったという点で、ジャイルズの恋は実ることがなかった。そればかりか、現実的認識力の欠如は、身近の借地・借家の形態の問題で早めの対処を怠ったばかりに、サウス（South）の死と同時に、借地・借家権を喪失して、生活の基盤を失い、リンゴ酒作りの季節労働者に落ちぶれて、グレイスの恋人の地位から転落するだけでなく、ストーリーの表舞台からも姿を消していく。

ジャイルズに代わって、グレイスの結婚相手として登場するのが、Fitzpiers（フィッツピアーズ）である。

フィッツピアーズは、本来、没落貴族の末裔で、Oakbury Fitzpiers という村にその名を賦与した貴族の家柄の子孫である。他の医者たちと医業が競合しない場所としてリトル・ヒントック村に医者の診療所を開業している[13)]。

彼は、いつかは都会で開業しようと思っており、今は仮住まいとしてリトル・ヒントック村で開業しているに過ぎない。

そんな彼は、グレイスの本質ではない都会的な洗練さを Grace の本質だと誤解したまま、グレイスに引かれていく。また、グレイスの父の財産は、フィッツピアーズが将来都会で開業す

るときの助けになるだろうとの打算もあって、グレイスと結婚する。

ところで、グレイスが結婚相手としてジャイルズとフィッツピアーズとの間でどちらを選ぶべきかを迷う点で、レイモンド・ウィリアムズが見事な分析をしている箇所があるので、引用してみよう。

> トマス・ハーディが生まれたのは、あのトルパドルからほんの数マイルのところ、労働組合を結成すべく結集した農場労働者が国外追放に処せられた（1834）数年後のことである。この事実だけをもってしても、ハーディが生み落とされたのが、しばしば彼が追いやられてしまう時間を超えた淀みのなかなどでなく、変化しつつあり、苦闘しつつある田舎の社会だったのだということがわかろうというものである。
>
> 〈中略〉
>
> しかしハーディの小説は、一作一作と変化を問題にするようになっていく。小説の背景となっている時代は、ハーディ誕生直前の時代から現に筆をとっていた時代までのどこかであるが、最後の、そしてもっとも深刻な小説、『テス』と『日陰者ジュード』は意味深くももっとも同時代的である。
>
> 〈中略〉
>
> ハーディがいまわれわれに語りかけてくるのは、古い田舎の世界からでも、遠隔の地からでもない。彼が語りかけてくるのは、なじみのものと変化しつつあるもののいまだに生きている経験の中心からなのである。
>
> 〈中略〉
>
> 構造自体が変化しつつあるなかで、流動性のもっとも直接的な影響は結婚の選択の難しさに現れる。そしてこの状況は、バスシーバがボールドウッドとオークの、グレイスがジャイルズとフィツピアズの、ジュードがアラベラとスーの、どちらを選ぶべきかに迷う例に見られるように、個人的であると同時に社会的なものとして繰り返し現れる。特殊な階級的要素と、階級的要素にたいする不安定な経済の影響は、煎じ詰めれば根本的には生きかたの選択であり、また誰かれの人間と一体になるという点でアイデンティティの選択である個人的な選択の、一部をなしている[14)]。

The Woodlanders における変化と言えば、いな、時代の流れと言うべきだろうか、労働者階級出身のメルベリーの一人娘グレイスが教育を身につけて、帰郷してくることだろう。メルベリーは、現在、材木商であるから労働者階級ではない。しかし、彼の元来の出身は、ジャイルズの父と同じ労働者階級であり、自らの努力と才覚によって材木商にまで出世したのである。

そのこと自体、レイモンド・ウィリアムズが言うところのヴィクトリア朝時代の流動性を象徴してもいる。都会的なものが田舎社会に流入するという流動性に満ちた時代であるからこそ、都会の教育を身につけたグレイスが、知識人で医者という専門職にあるフィッツピアーズと出会うということも起こりうるのである。

実は、都会の教育を身につけて田舎社会に帰郷する女主人公として、グレイスには先輩がいる。それは、*Under the Greenwood Tree* の Fancy Day である。二人の生き様、換言すれば、どのように結婚相手を選択したかを比較すれば、グレイスの特徴が浮き彫りになるだろう。

ヴィクトリア朝時代において女性が身につけた教育は、上の身分の男性を射止めるための武器であった。しかし、ファンシー・デイの場合、その教育を武器として使わずに、牧師のメイボールドと運送屋のディック・デューイとに求婚されて結局自らの意志で田舎者のディックを選んだのであった。それに対してグレイスは、これまでも触れているように、都会の教育を身につけたことによって都会の世界の価値観を身につけ、その結果、リトル・ヒントック村に戻ってきても、都会の世界にも田舎の世界にも所属し得ない、いわば、中間領域に身を置かざるをえないのである。その状況を語り手は、彼女が “in mid-air between two storeys of society” (p. 246) にあるとし、彼女が自らの行動基盤を失って自らの意志で結婚相手を選択できない様を描き出す。その結果、父親のメルベリーの言うままになって、愛情不在のままフィッツピアーズと結婚してしまうのである。父親の言うままに結婚するという点で、グレイスは結婚の問題でヴィクトリア朝時代の女性の置かれていた境遇を象徴してもいる。しかもまた、彼女の身につけた教育が、フィッツピアーズをしてグレイスに引きつける根本的な要因にもなっているのである。つまり、結果的には、グレイスの意志ではないにしても、彼女の身につけた教育が上の身分のフィッツピアーズとの結婚へとグレイスを導いたということになるのである。

それでは、節を改めて、彼等の結婚の特質について見てみよう。

⑶　身分差の結婚

グレイスとフィッツピアーズとの身分差の結婚[15)]は、身分差故の齟齬と亀裂を生み、フィッツピアーズをしてチャーモンド夫人との浮気へと駆り立てていき、結婚生活の破綻へと至る。

そもそも二人の間には、結婚前に既に身分差がもたらす齟齬が生じていたのである。例えば、結婚式をどこで執り行うかについて、フィッツピアーズは “at a registry office” (戸籍登記所) ですればよいと主張する。教会とは違って、田舎者たちにじろじろ見られなくて済むし、自分とグレイスとの結婚のことが人々の噂にのぼることがなくて済むし、それ故、将来バッドマスで医業を開業したときにグレイスの出身をとやかく言われなくて済む、とフィッツピアー

ズは考えて、戸籍登記所を主張するのである。フィッツピアーズにはグレイスの出自を上流の人々に知られたくないという気持ちがあるのである。ということは、一歩間違えば、上流の人々の目から見たら、秘密の結婚のイメージが付きまとうのである。

一方グレイスは、自分の周りの人々から祝福されたいということで、田舎出身であるから、この土地に根ざした伝統的な教会で執り行われる結婚式を望むのである（Chapter 23）。しかし、この件に関してはメルベリーの同意を得ていると言うフィッツピアーズに、グレイスは押し切られる形となる。しかし、先ほども述べたように、グレイスはフィッツピアーズが自分たちの結婚を何か隠しておきたい秘密の結婚のように思っているのではという疑いを抱いて、

> But she was indefinably depressed as they walked homeward. (p. 195)

と、漠然とした不安と憂鬱な気持ちとに支配されている。そしてグレイスは、結婚式を挙げる場所を巡ってフィッツピアーズが自分とは全く異なった考え方を持っていることから、自分にとってフィッツピアーズの生きる世界が異なっていることを思い知らされる。更にグレイスは、フィッツピアーズが Suke Damson（シューク・ダムソン）と浮気をしているのではないかと疑い、フィッツピアーズとの結婚に疑問を感じて、結婚を取りやめたいと父親に言うまでに至る。しかし、グレイスはメルベリーとフィッツピアーズとに巧妙に言いくるめられてしまって、教会で結婚式を挙げるという条件を彼女の方から出すことで、結婚に同意している。

グレイスには、以上のように、主体性の欠如、親の言いなりになるという受動性が作中随所に強調されている。こういった彼女の主体性の欠如と受動性は、ヴィクトリア朝時代の中産階級女性の境遇を象徴的に示している、と見るべきだろう。

結婚式の後、グレイスは父の家に夫と住むことになる。一方、フィッツピアーズは、大勢の村人たちが結婚の祝いに来たことに嫌悪感を感じ、妻のグレイスに村人たちとつきあうなと命じる。と同時に、フィッツピアーズはグレイスの周りの田舎人たちに嫌気がさしてくる。それで、バッドマスでの医者の開業権が800ポンドで獲得できることをメルベリーも承知済みだとグレイスに言って、暗に、この村を出ることを臭わせる。結局、身分違いの結婚は、どのように事が運んでも、グレイスをこの村での生活には留め置かないことを暗示する。しかし、ストーリーは、身分違いの結婚がもたらす夫婦間の不調和に加えて、フィッツピアーズとチャーモンド夫人との不倫関係をも描いていく。

チャーモンド夫人の計略によって、フィッツピアーズはヒントック・ハウスのチャーモンド夫人の怪我の治療をする巡り合わせになり、またそのチャーモンド夫人がフィッツピアーズにとって初恋の人であったことから、二人の間に恋の情熱が燃え上がる。フィッツピアーズは

チャーモンド夫人との恋愛のためにバッドマスでの医者の開業権すらも放棄してしまう。

親の言いなりになって結婚したものの、グレイスが彼女の結婚生活で見出したものとは、チャーモンド夫人との不倫に明け暮れる夫、また、その夫は結婚前にシューク・ダムソンとも肉体関係を持っていたということであった。このような境遇に置かれたグレイスがあまり怒りだとか嫉妬を感じない、と以下のように語り手は説明する。

> Grace was amazed at the mildness of the anger which the suspicion engendered in her. She was but little excited, and her jealousy was languid even to death. (p. 233)

> As her husband's character thus shaped itself under the touch of time, Grace was almost startled to find how little she suffered from that jealous excitement which is conventionally attributed to all wives in such circumstances. (p. 239)

グレイスは、何故、嫉妬とか怒りをあまり感じないのだろうか。結局彼女の結婚は愛情からのものではなく、親の言いなりになってしてしまった結婚であったからである。しかしそれでも、グレイスはとんでもない誤った結婚をしてしまったという後悔の念に駆られている。また、フィッツピアーズの不倫を知ったメルベリーも、娘をジャイルズと結婚させなかったことを後悔し始める。

ストーリーは、この後、フィッツピアーズと別れてくれというチャーモンド夫人に対するメルベリーの説得、フィッツピアーズと別れようと思って散歩に出たチャーモンド夫人とグレイスとの森の中での遭遇、落馬したフィッツピアーズが自分を助けてくれたのが義父のメルベリーとはつゆ知らず、自分の妻の身に何かが起こってくれれば自分を真に理解してくれる "a passionate soul"（p. 282）と結婚できるのにと、言ってしまい、メルベリーから振り落とされるフィッツピアーズ、そして、フィッツピアーズとチャーモンド夫人との大陸への駆け落ち、へと展開する。

ハーディは、この後のストーリーをグレイスの離婚の問題へと持ち込んでいるのだが、節を改めて検討してみよう。

(4)　グレイスの離婚問題

夫フィッツピアーズにチャーモンド夫人との不倫に走られ、その挙げ句に二人して大陸に駆け落ちまでされたグレイスという娘を持つメルベリーは、シャートンの市に出かけた折りに、

フレッド・ボーコックから声を掛けられて、

> ‘Under the new law, sir. A new court was established last year, and under the new statute, twenty and twenty-one Vic., cap. eighty-five, unmarrying is as easy as marrying. No more Acts of Parliament necessary: no longer one law for the rich and another for the poor. But come inside—I was just going to have a nipper-kin of rum-hot—I’ll explain it all to you.’ (pp. 298–9)

という具合に、グレイスがフィッツピアーズと離婚できる可能性のあることを知らされている。

しかし、我々読者はここで注意しなければならないことがある。それは、ボーコックがペテン師であり、メルベリーを鴨にして金儲けを企んでいる、という風な印象を読者に与えるような語り方を語り手（≒ハーディ）がしている点である。メルベリーと会ったこの時のボーコックは酒に溺れて弁護士の事務官の職を失って数年が経過しており、今では居酒屋で一件半クラウンで遺言書を作成することでかろうじて生計を立てているに過ぎないところまで落ちぶれていたのである。このようなボーコックにとって、夫に逃げられた娘を持つメルベリーは、離婚問題を解決してあげようと近づけばすぐに乗ってくる格好の鴨なのであった。

ボーコックの言うところの離婚法が the Matrimonial Causes Act of 1857であれ、あるいは、その改正法の the Matrimonial Causes Act of 1878であれ、いずれにしても[16)]、その内容に精通していれば、グレイスに離婚の可能性はほとんどないことが分かるはずなのである。しかし、いずれの法律の内容も詳しくは知らないボーコックであったからこそ、メルベリーと共にロンドンに出て、それらの法律に詳しい弁護士に相談に行くのである。当然のことながら、フィッツピアーズの conduct（振る舞い）はグレイスがフィッツピアーズと離婚できるほどには残酷なものではなかったので、結局、離婚できないことが判明する。

一方、恐らく離婚できるだろう、という情報がロンドンに出たメルベリーから、グレイスとジャイルズとの両者に、離婚不可能ということが判明する前に既に送られてきていて、その情報に基づいて、二人が接近し、結婚を前提にして付き合い始めたのを、語り手（≒ハーディ）は、次のようにコメントする。

> To hear these two Arcadian innocents talk of imperial law would have made a humane person weep who should have known what a dangerous structure they were building up on their supposed knowledge. They remained in thought, like children in the presence of the incomprehensible. (p. 309)

上掲のコメントは、語り手（≒ハーディ）が離婚法に精通していることを示唆している。しかし、このコメントからは、語り手（≒ハーディ）がラディカルな視点から離婚問題をこの作品で扱おうとしているのかどうかを見極めることはできない。William A. Davis が指摘していることだが[17]、ハーディは『ジュード』においては、破綻した夫婦関係は解消出来るべきだと述べている、ということであって、明らかに離婚法の改正を念頭に置いているようだが、『森林地の人々』においては、そこまで突っ込んだ考え方にまで到達しているとは言い難い。というのは、作品の結末について先回りして触れれば、グレイスのために掘っ立て小屋を明け渡したジャイルズは嵐に打たれて前年の冬にこじらせていた腸チフス[18]が元で亡くなり、一方、グレイスは結局夫フィッツピアーズと和解して、リトル・ヒントック村をあとにしてミッドランド地方に移住していくのであり、このような結末からは、離婚法は改正されるべきだというラディカルな主張を読み込むことはできない。つまり、この結末は社会ダーウィニズム的結末であり、時代の流れがもたらす社会の変化に対応できなかったばかりにジャイルズは死んでいくのであり、時代の流れに適応していたグレイスは、フィッツピアーズと和解して、故郷を去って、ミッドランド地方に出発するという未来がかろうじて残されているのである。但し、その未来がグレイスに幸福な結婚生活を約束するものではないにしても（pp. 389–390）[19]。

⑸　ラディカルな要素と複数の視点の働き

この作品において、グレイスの離婚問題というラディカルな問題が扱われているが、その扱われ方がラディカルな主張を読み込むことを可能とするような扱われ方ではないことを前節の終わりの部分で指摘した。

実は、女性にとっての離婚問題というラディカルな内容が作品内の一要素に過ぎず、ラディカルな主張とはならない構造をこの作品が持っていることを最後に指摘しておきたい。

筆者は今から25年ほど前に「*The Woodlanders* における複数の視点の働きについて」[20]という小論で、この作品には、１．密着的視点、２．巨視的視点、３．ノスタルジックな眼差し、４．ダーウィン的自然観、これら４つの視点が採用されており、その結果、主要登場人物たちの人生行路それぞれが均等の比重で描き出されていることを明らかにした。ここで、その論を再度詳細に展開する必要はないので簡略ながらこの拙論を要約すると以下となる。すなわち、この作品の語り手は、密着的な視点により物語の出来事を客観的に描いていき、ノスタルジックな眼差しから田舎世界の住人たちジャイルズとマーティとの人生を、そして、ダーウィン的自然観から派生する社会ダーウィニズム的視点から、都会世界の出身者フィッツピアーズとチャーモンド夫人らの生き様、女主人公グレイスの人生行路、並びに、ジャイルズの宿命的滅

びの人生を描き、巨視的な視点から人間世界のあらゆる営みを矮小化することによって、それぞれの主要登場人物たちの人生を均等の比重を持つものとして描き出している、ということを明らかにした。換言すれば、グレイスの結婚の問題を中心にして物語は展開しているけれども、読者は主人公グレイスの人生の問題のみを辿るような読解を妨げられている。従って、グレイスの結婚を通して触れられている離婚問題及び離婚法の問題は、それらだけが焦点を当てられてクローズアップするのではなくて、チャーモンド夫人の根無し草的人生、ジャイルズの社会ダーウィニズム的な滅びの宿命の人生、田舎世界の価値観を持ち続けて、ジャイルズの死後も彼に献身的な愛を捧げ続けるマーティの姿、他の主要な登場人物たちの人生の問題と共に読者の脳裏に焼きつけられて物語は終わっているのである。

特に、作品最後の章は、亡くなったチャーモンド夫人とジャイルズとを除くほとんどの登場人物たちが登場しており、この章は主要登場人物たちの人生行路を均等の比重を持つものとして描出しているというこの作品の構造の縮図ともなっているという意味で、まさにこの章は物語の最後を飾るに相応しい終わり方となっている。

人捕りわなの一件で、グレイスとフィッツピアーズとの間に和解が成立し、フィッツピアーズの叔母が遺してくれた遺産でミッドランド地方で医者の開業権を取得しているフィッツピアーズはグレイスに一緒にミッドランド地方に行くことを申し入れて、グレイスがそれを承諾したのである。ところが、フィッツピアーズの乗るべき最終列車が発車したあとであったので、二人はシャートンの the Earl of Wessex Hotel に行くことにしたのであった。このような成り行きを一切知らず、グレイスが庭にちょっと出ただけだと思っており、そのグレイスの姿がどこにも見あたらないので心配になったメルベリーが、必死になってグレイスを探しているので、リトル・ヒントック村のお馴染みの連中がメルベリーと共にグレイス探索に協力してくれ、ついに一行はシャートンの「ウェッセックス伯爵ホテル」までやってきて、グレイスとフィッツピアーズとの和解の顛末を知り、帰りに居酒屋で一杯引っかけてからまたリトル・ヒントック村に引き返していくというドタバタ劇が演じられる。リトル・ヒントック村に戻ってきた一行は墓地でジャイルズ・ウィンターボーンの墓前に花を手向けるマーティの姿を見かける。そして作品最後は、先ほども触れたように、永遠の愛をジャイルズの墓前に捧げるマーティの姿を描くことで、終わっているのである。

言い換えれば、この作品は複数の視点の採用によって、グレイスの人生の物語だけではなく、他の主要登場人物たちの人生の物語をも辿ることを読者は要請され、なおかつ、物語は、グレイスとフィッツピアーズとの和解という結末とジャイルズの墓前に永遠の愛を捧げるマーティの姿という結末、これら二つの結末が併置されているのである。

このように、グレイスの離婚問題を扱う中で、ラディカルな要素が盛り込まれてはいるが、

読者の関心がそこに焦点を結ぶのを阻止する構造がこの作品にはあることが理解されるだろう。

それでは、この作品は一体何を主題として描出しているというのだろうか。繰り返しになるが、1870年代初頭[21]の足掛け4年、期間にして2年半の間の、主要登場人物たちの人生行路の物語が互いに絡み合う形で描出されているということである。そう言えば、ハーディは彼の実質的な自伝である *The Life*. の中で次のように記している。

> The human race to be shown as one great network or tissue which quivers in every part when one point is shaken, like a spider's web if touched.[22]

上掲の引用中の "one point" をこの作品に当てはめて考えれば、この作品のタイトル候補の一つ "Fitzpiers at Hintock" が示すように、リトル・ヒントック村に医業を開業したフィッツピアーズその人であり、彼の存在がリトル・ヒントック村の主だった人物たちの人生に波紋をもたらす、その様が描き出され、それぞれにいろいろな影響を受けたそのすべては時代の流れがもたらしたものであることが、読後の読者の脳裏に刻みつけられるのではなかろうか。

注

1）R. L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford: The Clarendon Press, First Published in 1954, Reprinted in 1968 and 1978), p. 55.

2）William R. Rutland, *Thomas Hardy: A Study of his Writings and their Background* (New York: Russell & Russell Inc., First Published in 1938, Reissued in 1962), p. 212.

3）Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 154.

4）T. R. Wright, *Hardy and His Readers* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003), p. 160.

5）Weber, *op. cit*., p. 154.

6）Weber, *op. cit*., p. 155.

7）Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., Reprinted in 1973, First Published in 1962), p. 102.

8）Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (London: The Bodley Head Ltd., 1971), pp. 23–24.

9）Thomas Hardy, *The Woodlanders* (London: Macmillan Press Ltd., 1974 [paperback]), p. 35. 本文引用はすべてこの版からであり、以下頁数は引用等に続けて括弧に入れて示す。

10）Penny Boumelha, "The patriarchy of class: *Under the Greenwood Tree*, *Far from the Madding Crowd*, *The Woodlanders*", *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*, ed. Dale Kramer (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), p. 130.

11）T. R. Wright, *op. cit*., p. 162.

12）この点については、後ほど詳細に触れることにする。

13）『産業革命と民衆』（角山榮・川北稔・村岡健次著、河出書房新社、1992年、p. 289）によれば、ヴィクトリア朝時代は長子相続であったから、貴族の次三男は土地財産にありつけず、他の職業に就く他なかった。従って、医業を開業しているフィッツピアーズは長男でなかったことになる。また同書の同じ頁に次のような記述がある。

「またナポレオン戦争終結時（1815年）には、国教会の牧師、バリスタと呼ばれる法廷弁護士、それに内科医は、間違いなくジェントルマンと一般に認められるようになっていたから、これらの人々は、中流階級ではなく、上流階級にいれた方が本当はいいのかもしれない。」

14）レイモンド・ウィリアムズ著・山本和平・増田秀男・小川雅魚訳、『田舎と都会』（昌文社、1985年）、pp. 264–282.

15）身分差の結婚については、Michael Millgate（*Thomas Hardy—A Biography* [Oxford & New York: Oxford University Press, 1985], p. 279）が以下のように指摘している。

> but it seems possible that he [=Hardy] in some sense identified Grace Melbury with his grandmother, that he saw both of them as unhappily caught between conflicting class backgrounds and family loyalties, and that Betty Swetman's disastrous marriage to George Hand found an oblique reflection in the difficulties of Grace's relationship with her husband, Edred Fitzpiers.

16）この作品で扱われている離婚法がいずれの離婚法であるのかについては、拙論「*The Woodlanders* の時代設定について」（『教養部紀要第58巻第2号』）を参照されたい。

17）William A. Davis, *Thomas Hardy and the Law: Legal Presences in Hardy's Life and Fiction* (Newark: University of Delaware Press, 2003), p. 123.

18）『産業革命と民衆』（p. 191）によれば、ヴィクトリア朝時代には、腸チフスがよく流行したようである。ヴィクトリア女王の夫君アルバート公も腸チフスが原因で亡くなっている。

19）Simon Gatrell, *Hardy the Creator: A Textual Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1988), p. 133.
H. M. Daleski, *Thomas Hardy and Paradoxes of Love* (Columbia and London: University of Missouri Press, 1997), p. 150.

20）拙論「*The Woodlanders* における複数の視点の働きについて」（『松元寛先生退官記念論文集—英米文学語学研究』［英宝社、昭和62年、pp. 222–229］）

21）この作品の時代設定については、拙論「*The Woodlanders* の時代設定について」（『教養部紀要第58巻第2号』）を参照されたい。

22）Florence Emily Hardy, *op. cit*., p. 177.